

# 女のスポーツをめぐる語り

—世界女子オリンピック(1926年・1930年)報道の分析—

浜田幸絵

## 1. はじめに

スポーツは、近代社会の男性的原理に基づいて発展してきたものであり、スポーツをすることは〈男らしさ〉の表明であり続けてきた。女性がスポーツを行うことが一般的となりオリンピック出場選手の4割以上を女性が占めるようになった現在でも、スポーツは「ジェンダー」をめぐる諸問題を色濃く反映している<sup>1</sup>。スポーツは男女別に競技が行われるが、このこと自体が「男性が女性よりも身体能力の面で優れている」という認識の存在を示している(実際には、男性の多数よりもスポーツで優れた能力を発揮する女性は少なくない)。また人間を「男性」か「女性」に振り分けることによって生じる矛盾は、スポーツの世界においては、性同一性障がいや性別変更をした選手、インターセックスの選手の参加をめぐる問題として現れてきた。しかし、ほとんどの人は、男女別に競技を行うことを疑問視したり不公平だと考えたりすることはない。性別ごとに競うことが当然とされているスポーツをめぐる語りは、男女の本質的違いをめぐる言説となって、社会のなかを循環しているのである。

歴史的にみたとき、女性がスポーツ(体育、運動、競技)を行うことを「好ましくない」と考える人が多くいたことは、様々な資料が示している。例えば『体育と競技』の1924年3月号では、埼玉県体育主事の中島海が、女学生が跳躍、競泳、インドア・ベースボールなどに熱中していることに関して、「熾烈な闘争的競技」や「敵手に優越せむとして剛健な心意の緊張」を強いる練習が、「優しい性情」、すなわち「女性の心理的特質」を失わせる恐れがあると述べている。中島は、「婦人の体育」と題したこの論説を、次のように締めくくる。

一般体育の実施に生理的考案を必要とする様に、女子体育には特に女子の身体に関する生理的考察を経なければならない。人間の芸術品として見る訳でもなければ、男子の鑑賞の対象とする訳でもないが彼のヴェイナスの豊艶な肉体なだらかな曲線、優和な表出、愛其ものゝ表現であるかの様な身体は

両性の一つである処の女性の理想的発達を現すものではなからうか。

百米のフィニッシュに極度の精神緊張を顔面筋の総に現し、上半身をコントロールにする<sup>ママ</sup>双手に最後のストラグルを示した勇姿や、幾多の練習に結果した隆々たる体の美は男性にこそ望ましい。彼の古代希臘の彫刻に見る男神女神の像は男性女性の理想的発達を確したものと思はれる。何としても男女を扱ばない唯単に女性を強くせむとすることを女子体育の目標とする主義には左胆し兼ねる。<sup>2</sup>

女性は「ヴィーナスのような身体」の持ち主であることが理想であり、スポーツで鍛えぬいた身体、そしてスポーツに伴う精神的緊張と闘争心は、男性にこそふさわしい。こうしてスポーツから女性を遠ざけようとする言説は、日本のみならず欧米で近代スポーツを主導する人たちの間にもみられた。オリンピックでは、1900年の第2回パリ大会で初めて、女性が20名ほどテニスとゴルフに参加したが、第二次世界大戦前までは、いずれの大会においても女子選手は全参加選手の1割にも満たなかった<sup>3</sup>。1928年アムステルダム大会では初めて女子の陸上競技が採用されたものの、800m競走は、女性には過激すぎる<sup>4</sup>として翌大会では廃止された。女性のスポーツ参加は、大幅に制限され、特に競技性の高い種目から女性は排除されてきた<sup>4</sup>。

ただし、スポーツを女性から遠ざけようとする語りや実際の動きがあったにもかかわらず、1920年代の半ば頃は、女性のスポーツが盛り上がった時期でもあった。第一次世界大戦後のヨーロッパでは女性のスポーツが一層盛んとなり、日本でも、1920年代には高等女学校でスポーツが多く実践され、女学生は校外にまで試合に出かけるようになった。運動を通じた心身の育成を目的とした体育は明治後期から一部の先進的女子教育機関で試みられていたが、これが競技化し、また全国に広がっていったのである。1920年代も後半に入ると、一部の女子選手が、日本から海外に遠征しはじめる<sup>5</sup>。これらのことは、短期間の間に、スポーツは女性の身体や性格に悪影響を与えるといった語りや押しやられ、別の語り—女性の（国際）スポーツ進出を後押しするような言説—が登場し、影響力をもつようになった可能性を示唆している。日本の場合は、陸上の人見絹枝、水泳の前畑秀子といった選手たちが1926年以降世界に進出していったことが、女性のスポーツに肯定的な言説を生み出す転換点になったのではないかと考えられる。

本稿では、1926年と1930年の世界女子オリンピックに出場する選手たちに関する新聞報道から、女子スポーツの語られ方を考察する。この頃の日本のスポーツ界における女子選手の国際派遣に対する認識については、來田享子がスポーツ雑誌（『スポーツマン』『アスレチックス』『運動界』『体育と競技』）を史料として、実際に国際派遣が行われるようになると、そこでの活躍を期待する内容の記事や女性自身の手による競技会の報告が増えていったことを明らかにしている<sup>6</sup>。また小石原美保は『少女倶楽部』を対象とし、その創刊（1923年）から1930年代末までの「スポーツ少女」の表象を研究し、『少女倶楽部』では、1927年から1935年にかけて、表紙にスポーツをする少女がかなりの頻度で（計10回）登場していたとしている。小石原が具体的に示しているのは1934年と1935年の記事のみであるが、同誌の「スポーツ少女」の記事は、和装で家事に勤しみ、優しく大人しいといった伝統的な「女らしさ」の奨励を行う一方で、元々は男性の行動規範として生まれた「スポーツ精神」を取り込んでジェンダー規範を少しずつ書き換える側面もあったという<sup>7</sup>。

來田や小石原の研究は女子スポーツの表象を取り上げているものの、分析対象は読者層が固定化された雑誌である。女性のスポーツの社会的な語られ方をみていくのであれば、分析対象としては、より幅広い階層・年齢・性別に対して開かれた媒体である新聞の方が適切であろう。新聞に掲載された女性のスポーツに関する記事は、単に競技結果を伝えるだけでなく、「女」、特にその「身体」をめぐる言説を生み出していたのであり、それが、「女のスポーツ」や「女の身体」「女の心理的性質」に関する知識となって社会に蓄積していったと考えられる。

女子スポーツの黎明期におけるその表象は、新聞、スポーツや教育関係の雑誌、少女雑誌、婦人雑誌などの様々な媒体に存在する。これらの表象はどのような読者に消費され、読者たちはどのような女子スポーツに関するイメージを形成していったのだろうか、記事の書き手、編集者、新聞社、出版社にはどのような意図があったのだろうか。様々なメディアの表象とその送り手・受け手の問題を総合的に検討する必要があるが、これらを一挙に明らかにすることは難しい。そこで本稿では、まず新聞記事における女子スポーツの描かれ方、それも1926年と1930年の世界女子オリンピックに絞って分析を行う。

## 2. 分析対象

本稿で分析対象とする新聞は『大阪毎日新聞』（以下、『大阪毎日』と記す）である。日本におけるスポーツ・イベントの発展を考えるうえで新聞社が果たした役割は大きく、特に女子スポーツを考えるうえには大阪毎日新聞社が重要である。大阪毎日新聞社は、いち早くスポーツ関連の事業に力を入れ、女子スポーツにも目をつけていた<sup>8</sup>。1926年春には、三段跳で世界記録を出していた日本を代表する女子選手、人見絹枝を入社させた。1924年から1935年までは毎年、日本女子オリンピックを後援した。世界女子オリンピックへの選手派遣母体であった日本女子スポーツ連盟の会長は、大阪毎日新聞社運動部長の木下東作であった。

分析対象とする報道は、第2回及び第3回の世界女子オリンピックに関する報道とする<sup>9</sup>。第2回大会は、1926年8月27日から29日までイエーテボリ（スウェーデン）で、第3回大会は、1930年9月6日から8日までプラハ（チェコ）で開催された。世界女子オリンピックとは、国際女子スポーツ連盟（1921年設立）が主催する競技会で、第1回大会は、1922年8月にパリで Women's Olympic Games という名称で開催されている（参加国はフランス、イギリス、アメリカ、チェコ、スイスの5カ国だった）。この競技会には、男性主導の国際オリンピック委員会（IOC）や国際陸上競技連盟が、オリンピックで女子陸上競技種目の採用を拒否していたことに対する抗議の意味が込められていた<sup>10</sup>。第2回大会からは、国際女子スポーツ連盟がIOCの要請を受け入れて「オリンピック」の名称を大会名に用いないことになったが（代わりにIOCは女子陸上競技種目のオリンピックでの採用を認めた）、日本では、「世界女子オリンピック」「万国女子オリンピック」などと呼ばれていたため、本稿では、「世界女子オリンピック」と表記する。

日本にとっては、第2回世界女子オリンピックに人見が参加したのが、女性が海外の国際競技に出場した最初である。続く第3回大会には、人見に加えて、渡邊すみ子（私立名古屋高等女学校）、村岡美枝（愛知県第一高等女学校）、本城はつ、中西みち、濱崎千代（いずれも京都市立二條高等女学校）が参加した。なお第2回大会と第3回大会の間に開かれた1928年のアムステルダム・オリンピックには、人見が日本からの唯一の女子選手として参加した。他に女子選手の海外派遣としては、1929年夏に前畑秀子ら4名の女子水泳選手が、ハワイで開かれた全米水泳選手権に出場している。

分析に入る前に、本稿で取り上げる新聞記事のジェンダーの視点からみた特徴についても確認しておきたい。内藤千珠子は、男性が中心となるメディアにおいて、女は、異質な記号であり、物語を豊かにする要素であるとし、「メディアはたえず、物語のなかに女という記号を欲望している」<sup>11</sup>と述べている。当時の新聞社が、男性中心の組織であったことは言うまでもなく、紙面に登場する女性たちは、「異質で不可解なもの」として物語に刺激を加える役割を担わされていたと考えられる。ただ、世界女子オリンピックの報道を考える際に重要なのは、大阪毎日新聞社の記者であった人見自身が表現者であったことである。この報道は、日本人女性が最初に参加した国際競技の報道であっただけではなく、女性が、自らの参加する競技会について言語化したものであった。

もっとも、世界女子オリンピックの報道を人見個人によって生み出されたものと解釈するには無理がある。小森陽一は、「新聞記事とは、新聞記者という個別の認識者かつ表現者が、一つの出来事を読者にむかって言語化した軌跡に過ぎない」<sup>12</sup>として、新聞に書かれたものは、事実についてのある一つの語りだとする。そのうえで、次のように述べている。

新聞記事に、あらかじめ事実性が保証されていると信じることのできる根拠はどこにもない。しかし、このことは、新聞記者個人の「主観性」によって規定されているだけではない。個人である記者から送られてきた原稿をチェックするデスクの意識の偏き、その意識を自己規制するであろう、同時代の言説状況、その中から想像的に編み出されていく読者像、その読者に情報商品として満足して消費してもらうことへの配慮等々、新聞記事の言説は、情報を発信する新聞社内部だけをとっていても多種多様な、見える規制と見えざる規制の力関係の中から、ある歴史性を背負って現象しているのである。<sup>13</sup>

人見の書いた記事であっても、それは、男性中心のホモソーシャルな構造のなかで生み出されるメディア言説であった。しかし人見の存在は、当時、新聞と女性の関係や女性をとりまく社会状況が大きく変動しつつあったことを表している。1916年に大阪毎日新聞社が婦人社会見学団、1919年に大阪朝日新聞社が婦人会関西連合会（のちの全関西婦人連合会）を設立するなど、新聞社は、大阪紙を中心に女性読者の組織化に力を注ぎ、女性記者も起用していた<sup>14</sup>。

1925年には普通選挙法が成立したが、前後して、婦人参政権の運動家たちは「婦選なくして真の普選なし」と訴えた<sup>15</sup>。婦人参政権運動は政治家たちの賛同を獲得し、1930年と1931年には、婦人の市町村公民権を認める法案が衆議院を通過した<sup>16</sup>。世界女子オリンピックの報道には、新聞や社会における女性の位置づけが反映されていたといえるだろう。そこに、「女」をめぐる物語の新しい型を見出すことができる可能性もある。

### 3. 第2回大会報道の分析

『大阪毎日』は、7月1日、朝刊の1面で「わが社今夏の新計画」として、「本社婦人運動記者人見絹枝嬢 万国女子オリムピック出場 スエーデン国ゲーテンプルグに遠征」と発表した。人見については、写真を掲載し、次のように紹介している。

同嬢は岡山高女出身で二階堂体操塾卒業後京都第一高女に教鞭をとつたが再び二階堂塾で研究を重ね本年四月本社に入社した人です、同嬢がホ・ス・ジヤムプ、立高跳、二百メートル競走等で世界的レコードの保有者であることはあまねく社会の知る所であります、同嬢は七月二十一日ハルビン発シベリア線で大坂赤十字社病院長前田博士と共に出発するはずであります。[朝1]<sup>17</sup>

人見のことを知らない読者もいた可能性はあるが、女子の体育・運動・競技に携わる者にとって「世界的レコードの保有者」である人見はすでにスターといえる存在であった。同じ日の紙面には、「運動に興味を持つ女学校卒業生並に在校生の婦人達」で、かねてから協議中であった「美しい体育団体組織」が結成され、この組織（「日本婦人体育倶楽部」）と健母会<sup>18</sup>の共催で、人見の送別会を行うという記事も掲載されている[朝7]。さらに7月5日には、実際に会が催され、「世界の大舞台に出で、堂々と闘ひ天晴れ日本の女性のため名誉を博して栄ある婦朝を待つ」との送別の辞があったとある。会には「熱心な女子運動家」ら70名が集まり、中には「子供連れの婦人」もいた[7/5朝3]。紙面では、運動をする女性たちの熱心さと健康さが強調されている。このとき高等女学校に通うような層から運動愛好家が多数うまれていて、人見は、彼女たちの大きな期待を背負ってヨーロッパに向かうことになる<sup>19</sup>。

7月8日夜、人見は大阪駅を出発する。出発に関しては、当日の朝刊の7頁

に「本社の人見嬢今夕出発 八時二十分大阪駅発特急で 外征の途に上る」と予告がでているほか、翌日の朝刊1面の中央で、写真つきで大きく報道された。図1にあるように、記事には、「人見絹枝嬢の勇ましい門出一大阪駅頭の盛な見送り—」との見出しが掲げられ、大阪毎日新聞社の関係者、そして数多くの婦人や少女たちの見送りのもと出発する様子が描かれている。「真紅に燃ゆる日章のマーク」のついた半袖シャツを着た人見は、腕をのぞかせ笑顔をみせる。「凛々しい姿」で「いさましく外征の途につく」人見は、まさに女性の星といった感じで、活発、清潔、健康そうで自信に満ち溢れている。



図1 人見の出発報道 (1926/7/9 朝1)

出発後は、各地から人見通過のニュースが入ってくる。「元気一杯 人見絹枝嬢 京成で練習」[7/12朝3]、「コーチを終へて京成出発 総督に激励された人見選手」[7/13朝7]、「人見選手奉天通過」[7/14朝7]、「人見絹枝嬢ハルビンに着」[7/15夕2]といった具合である。人見は行く先々でコーチをし、その模様が紙面でも伝えられた。特にハルビンには一週間滞在し、競技会にも出場した。新聞は、「市中には至るところ大きなピラがはられて大変な人気である」[7/18朝7]、「日露支の観衆の喝采を博し」[7/19朝7]と人見がハルビンで人気を集める様子を繰り返し伝えた。「国境を越えてスポーツの握手—ハルビンの人見絹枝嬢—」の見出しで、ハルビンでロシアのスポーツマン（男子選手）に囲まれている写真も、掲載されている【図2】。日本を離れても大変



図2 ハルビンからの報道 (1926/7/24 夕2)

な人気者で称賛される人見、「屈強」な男たちにも一目置かれる「健康」な人見、そのような物語が、早くも始まるのであった。

人見がゴータンブルグ（イエーテボリ）に到着したことは、速報され、第二報では「他国選手に魁けて人見嬢の一番乗り」の見出しで、早速練習に励む様子が報じられた [8/6夕2, 8/7夕2]。人見は、大会が始まるまでの間、練習に打ち込み、時には、世界記録やそれに近い記録を出した [8/11朝7, 8/14朝7]。「ゴータンブルグの新聞雑誌は筆をそろへて人見嬢の大会における成績の刮目すべきことを書き立てゝゐる」と、現地の人々が人見の「猛烈な練習ぶり」に驚いていることも報じられた [8/24夕2]。

人見の「猛烈な練習ぶり」は、競技会での活躍につながる。競技会の模様は、連日トップニュース扱いであった [8/29夕1, 8/29朝1, 8/30朝1, 8/31夕1, 8/31朝1]。29日夕刊は、1面に「第二回国際女子オリンピック大会始まる一第一日の競技に人見選手快勝す 円盤投決勝二等（三三米六二）百ヤード決勝三等（一二秒）」の見出しを掲げる【図3】。大会への参加選手は8カ国71名、内訳は、英国20名、チェコ11名、フランス9名、リトアニア4名、ベルギー4名、ポーランド7名、スウェーデン15名で、1人で参加しているのは日本だけである。人見は「疲労を休める暇もなく」次々に競技に出場して「孤軍奮闘」した。日本では時々しかやっていた円盤投は、現地に着いてから「チョツと練習して」二等に入ったのだから、「実に驚くべき天才」である。「日本男子の方がオリンピックの陸上で初めて六等に入賞したのは一昨年だが早くも今



図3 第2回世界女子オリンピック第1日目の報道 (1926/8/29 夕1)



年に女子が二、三等の栄を世界的の檜舞台で得たのだから幸先きのよいこと、いはねばならぬ」と、人見が、その才能によって、世界の舞台で男子以上に活躍できていると報じられていく。

人見は、この大会において、ただ一人の東洋からの参加選手であり、異彩を放っていた。29日朝刊では、黒田特派員が入場式の様子を書いているが、そこには「人見嬢はたゞ一人白のユニフォームに七六の番号と、日の丸と『大阪毎日』の文字とを胸に、自ら日章旗を捧げて参列したが、欧州各国人に伍するたゞ一人の東洋人として注目をひいた。会場には日本人としては人見嬢とつきそひの余（黒田特派員）とたゞ二人あるのみで光景自ら凄愴、思はず涙が頬をつたはつて来る」「人見嬢の孤軍奮闘は、満場の同情をかひ人気を一身に集めてゐた」とある〔朝1〕。走幅跳と立幅跳で優勝した人見には、名誉賞が授与された〔8/31夕1〕。31日の朝刊には、観衆の人見に対する反応が、次のように書かれている。

人見嬢が勝つて日の丸の旗が揚げられた時、又退場する時などは万雷のやうな拍手がスタンドから湧き、熱狂した観衆は人見嬢をおつとりまいて幾度となく胴上げさへした、又各新聞紙は一斉に筆を揃へて人見嬢の奮闘は驚異の外ないといつてゐる、人見嬢が各方面から受けた花輪は山と積まれた、中にもゴーデンブルグ滞在中われわれの毎日通つたスタジアムの従業者一同が特に人見嬢に花輪を送つたのはオリムピック美談の一つとして取沙汰されてゐる競技終り日本人一同日の丸の旗と本社の社旗と山の如きトロフィーをのせた二台の自動車で引揚げた時は熱狂した群衆のために自動車は幾度か立ち往生した〔朝1〕

単独で競技会に出場した人見が、猛練習の成果を上げて観衆の注目を一身に集め、日本人も歓喜する様子が伝えられているのである。競技会の会期近くに紙面に登場した人見選手の写真は、大会開幕前に撮られたものだが、黒田特派員とともに並ぶ写真、スタートの姿勢をとった写真、スウェーデンの女子長距離選手と肩を組んだ写真と、人見は堂々としたショートパンツ型の運動着姿で写っている〔8/29朝1, 9/1朝2〕。特にスウェーデン選手との写真は、二人の足の筋肉が目立っていて、人見がスウェーデン選手と同等の体格の持ち主であることを示す。世界女子オリンピックは、自ら飛行機を操縦して現地入りをす

るイギリス人の選手がいるなど、新時代の女性たちが集う舞台として描き出されていて [8/26 朝7]、その中に、人見も違和感なく溶け込んでいたことになっている。

今回の遠征は、人見自身によっても語られる。同行の黒田や通過地の特派員から送られてくる記事は、おおそ時系列に沿っているが、人見の書いた記事は、この紙面上に構成された時系列をかき乱すかのように、少し遅れて掲載されることが多い。こうした点からみても、人見の記事は、他から区別される。人見の書いた記事は、単なる旅行記としても読めるが、時折、読者に向けての呼びかけが行われ、あふれんばかりの競技への意欲が表明される。

皆さん行つて参ります。私も一人の若い女性としてこんな大任を全うできるかどうか分かりません、今の私には親も、兄姉も何もありません、たゞ自分の今握つてゐる務を全力を尽して果したいのみです、御国のために雄々しくやってきます心の底に「しつかりやるのだ」といふ考へがあるのみでバカに心が落ちついてゐます [7/16 朝7]

上記の部分からは、出発を前に人見がかなり気負っている様子がうかがえる。「若い女性」の役を自ら引き受けながらも、「若い女性」とは対極にあると世間一般では考えられているはずの「雄々しさ」と「落ち着き」を示している。基本的に、人見は、希望的予測を書くことはなく、自らの競技力を冷静に分析する。大会出場直前の記事には、百ヤードの第一予選は「辛うじてパスするでせう」、二百五十米は「他国の選手は皆ラストがきくのに、私はラストがきかぬ傾きがあるので初めの百米を十一秒三か四で走り、次ぎの五十米のカーヴとカーヴをはなれてからの五十米まで（百米）を十三秒五ぐらひで走り、残り五十米を七秒五ぐらひで走れば第一予選には楽に入れると思つてゐます」などとある [8/27 朝7]。百ヤードか二百五十米のいずれかを棄権する可能性がある、円盤投はここに来て初めてやり出したので大会参加は無謀の観がある、走幅跳は助走路の弾力が少ない、と自分を強く見せて読者の期待を必要以上に喚起することはない。

人見は、各地のスポーツ事情も伝える。京城については、次のように書く。

鮮人の女は内地の女に比して十分発達して、床につくにも内地と変つてま

つすぐに寝るから脊柱も正しいが、身体のこなしの利かないとはまた驚くばかりだと聞きました。高跳とか、走るとかいふとだらしないう女のやうに家庭でいうてゐるさうで、鮮人の競技もこゝ二年程前までは全く振はなかつたさうです。今はこれが少しばかり芽生えてきたといふのでせう、尤もこの事は内地の家庭でもさういふのがありますから余りエラさうにもいへません。男子の競技会では、鮮人が勝つと、三日も四日も楽隊を引きつれて町々を練り歩くさうです、今日は幸ひ鮮人の女学生をコーチすることになつたので、一つしつかり研究してみたいと思つてゐます [7/16 朝7]

人見の観察熱心、研究熱心な様子が伝わってくる。また、スポーツをする女はだらしないう女だという考え方への反発が、朝鮮という植民地の現状を紹介するかたちで表明されている。ハルビンからも、一周二百二十メートルのトラックがあり、毎週土曜日の午後八時頃から競技会が行われている、グラウンドは冬にはスケート場になる、現地の選手たちは日本人選手のように偏った体格をしていない、などと報告があった [7/29 朝7]。日本との比較の視点を織り交ぜつつ、各地のスポーツについて人見が観察したことが紙面に掲載されていたといえる。

大会終了後も、人見が書いた記事は掲載される。9月2日には、各国の女流選手には「二十代の女が多い」、日本は「もう二三年は着実に、熱心に練習をつまねばだめだ」と、大会出場後の感想が伝えられる [朝7]。9月12日には、一ヵ月以上遅れた往路の旅日記「アボ港からストックホルムまで」 [朝11]、22日と30日には、スウェーデンで練習に励んでいる期間について「秋と風呂と足とマッサージ」 [朝10] と「外国選手の顔とレコード」 [朝11] が掲載されている。「旅日記」の内容は、じゃがいもを注文しようとして失敗した話、滞在三週間もなるが言語が心配で一人で買物にさえ行かないことをマネージャーにからかわれた話など、とりとめのないものも多い。自らを「女気のない」とし、大会に参加する外国選手について「変な顔の選手も相当ある」、マネージャーが「縁遠い」とうめいたなど、女子スポーツ選手の「女性らしさ」や「女性性」を否定するような箇所もある。

帰りの旅についても、モスクワ、チチハル、ハルビン、奉天、大連、旅順、京城、釜山など、各地から逐一記事が届いているが、この中で強調されたのが、人見がホームシックにかかっていたことである。9月17日の記事「晴れの使

命を果して「女らしい懐郷の憂愁」には、次のようにある。

世界的名誉をになつて去月末日奮闘の地ゲーテンブルグに名残を惜みつゝ、モスコーを経て凱旋帰朝の途についた本社記者人見絹枝嬢は十五日午後五時満州里とハルビンの間にあるチチハルに到着した、こゝまで出迎ひに出た私（玉置ハルビン特派員）が列車内に飛込むと嬢は日本のため大きな責任を果し終つた心のゆるみと女性の身として単身ベルリンからシベリアまで汽車で乗り通した極度の疲労とで午睡をむさぼつてゐたが意外の出迎へに嬢は飛び立つばかり打喜び私の持参した戦績を語る大阪毎日新聞を手渡すと今更のやうに胸を躍らせつゝ、暫くの間は本紙の記事に見入つてゐたがやがてトランクの中から燦然と輝く七個の大小名誉トロフィーを取り出し「お出迎へ有難う非常に疲れてゐますから早く帰れるやうにして下さい」と三ヶ月の旅に極度のホームシックにかゝつてゐる様子であつた〔タ2〕

世界女子オリンピックの報道は、人見の活発で力強い様子を伝えてきたが、帰国を前にして、重い責任に押しつぶされそうになっていた人見、弱々しい人見が「女らしい」と意味づけられて登場する。

帰国後は、下関、岡山、大阪と、人見は大歓迎を受ける。この時、再び人見は、はつらつとした姿をみせる。特に岡山と大阪での歓迎の様子は、10月1日の夕朝刊の一面で、写真つきで報じられた。特に10月1日の朝刊は、トップニュース扱いで、「輝かしい光栄を荷つて人見絹枝嬢無事凱旋す」と見出しを掲げる。本社で開かれた歓迎会に、「スエーデンの野に見せたその雄姿を偲ばす純白の洋装」で登場した「人見嬢」は、次のように答辞を述べた。

苦しいこと、辛いことの数あつたうち二三週間の練習や大会の日までの苦労など申せば恰度要したと同じ月余の日時を持たねば皆様に御報告は出来ませぬが私にとって最も記念すべきは、第二日目の走幅跳びの日でした（中略）五回まではどうしても思ふやうに得意のスタートに右足が出ません然かも五回目には手を傷つけ鮮血をかくして神を祈つて一步スタートを前にして走ると不思議や得意の右足が出ました、涙と血につまつた胸はハツと開きました、その時始めて五メートル五〇が出ました英のガン嬢は最後の六回目を踏切板でファウルして日章旗は高々と揚りました、日本国旗の旭日旗をはつ

きり知らぬ北欧の人々はこれを珍らし気に眺めました、日本の女性といへば芸妓を代表的に見てゐる彼地に始めて真の我々女性の意気を見せ得たことは妾の一生を通じて忘れ難いことです、今後とも真の日本女性の姿を世界に見せることに皆様も務めて頂きたいと存じます [朝1]

人見は、極度の緊張に耐えて日本国旗と日本女性の意気を知らしめたことの意義を満足そうに語ったのであった。人見の歓迎会には、多くの人が集まった。大きく掲載された歓迎会の写真では、特に女学生の真剣な表情が目立つ【図4】。夕刊の1頁にも、人見の母校での講演について「語るも聞くも感激の涙」との見出しが掲載されている。帰国後は、女学生が人見の話に感銘をうけるという物語がはじまったといえるだろう。

大会前後の紙面には、世界女子オリンピック以外にも、女性のスポーツに関する記事はかなり掲載されている。これらは、人見の報道とともに女性のスポーツをめぐる物語を構成している。8月4日には、大阪の女子選手たちが東京で開かれる水上選手権大会に向かう時の写真 [朝9]、8月8日には、英仏海峡を女性として初めて横断したアメリカのエダール嬢の写真 [夕2]、8月30



図4 人見帰国歓迎会の報道 (1926/10/1 朝1)

日には、別のアメリカ人女性が英仏海峡を横断したという記事〔朝7〕、9月17日には全国女子競泳大会に「赤ちゃんを抱へたお母さんも出場」〔朝7〕という記事と、逞しいスポーツ女性が次々と紙面に登場している。また、満洲の修学旅行から帰ってきた女学生に関する写真付きの記事もあり〔8/25朝9〕、人見のヨーロッパ遠征とともに、女性が海外に旅をして見聞を広める時代が到来したことを示している。

スポーツをする女性たちを好意的に捉える記事があふれるなかで、医学博士の渡辺範介による「女子の運動と母性機能」という記事は、女子のスポーツにやや慎重な態度をとる〔7/29朝10, 7/30朝7, 8/4朝10〕。渡辺は、競技運動は「感情的な女子では勝負に熱中するのあまり自己の体力を顧みるの暇なく遂に過労に陥り、その結果身体の発育を害し健康を害ふことになり易いのであります」「近来女子競技の勃興につれて男子の競技をそのまゝ女子に課せんとする傾向があるやうに見えるが、男女はすでに体力において著しい相異がありその天職もまた自ら異つてゐるから、女子には女子に適當した競技種目を選びその程度即ち運動量に相当の斟酌を加ふるのが至当であらうと思ひます」という〔7/29朝10〕。医療的言説では、女子は「感情的」であり競技運動は慎重に管理されるべきであるとされたが、当時の人見には、こうした医療的言説を打ち壊していくようなところがあった<sup>20</sup>。

人見は、ヨーロッパ遠征によって「日本の人見」「世界の人見」になった。単独で旅行し競技会に出場したというだけでなく、自ら文章を書き送ってきたという意味でも、力強く、新しい日本女性のあり方を示していた。出発前の京城では、斉藤実朝鮮総督と会談し、帰国途中には、ハルビンで天羽英二総領事に「人見嬢によつて初めて日本女性は世界に紹介された」と激賞されたと伝えられた〔7/16朝7, 9/18朝7〕。人見が遠征中に来日していたスウェーデン皇太子からも、一目を置かれる存在だった〔10/5朝1〕。

人見は、断髪で、肌を露出させ、職業も持っていたが、これらの表面的な特徴が想起させる「モダンガール」の物質的・奢侈的・享乐的・退廢的・官能的なイメージからかけ離れたところにいた<sup>21</sup>。人見は、活発ではあるが、勤勉で禁欲的で、新しい日本の女性を代表するにふさわしい存在として表象されたのである。

#### 4. 第3回大会報道の分析

第3回大会には、人見も含めて6名の選手が日本から送られる。この時にも、各所で送別会や送別競技会が開かれたことが伝えられた。また前回大会ではなかったこととして、文部大臣が日章旗と金一封を「渡欧女子選手」の主将である人見に贈った。「文相は今回彼地に行かれる六名の選手は、いづれもすぐれた人々のみで、大いに意を強うしてゐる、皆さんが出場される時は皆さんの背後に必ず日本の国旗がついてゐるといふことを忘れないやう十分奮闘活躍を願ふものである、なほ健康に対してはよく注意しこの遠征を終へられるやうと訓示した」のだった〔7/16夕1〕。

7月25日の朝刊には、「渡欧女子選手を送る」と題した社説と「行つて参ります プラーク目指して」という人見の手記が掲載されている。手記には、断髪の人見の顔写真が添えられ、次のようにある。

今日まで至るところで開かれた送別会ごとに選手等はあの感激に満ちたアトモスフィアに幾度身ぶるひしながら感泣したかわかりません

私等は小さな少女等から組織された小さな日本女子スポーツの全権であります

しかしよしこの身は小さくとも一度び母国の地を離れてヨーロッパの地に足を踏入れ、ば立派な新時代の日本女性として意気において、技術において決して意地ぎたなく、いちけてゐるやうなことはいたしません、第三回世界女子オリンピック大会に馳せ参ずる二十有余国の欧米選手にまじつて恥かしくない活躍を続けます

(中略)

四年前たゞ一人でゲーテンブルグのグラウンドに立つたことを思へば、いま私の後にいぢらしいまでに健やかな五名の若い選手がゐることを、どんなにか力強く思はれるでせう

六つの力が一つになつてどこまでも大和民族の魂をこめれば十の力も十二に十五に大きくなることと信じます、やつて見ます、必ずやつて見ます

「技術もさることながらあなた方はたゞスポーツの使者だけではない、日本三千余万の女性の代表者たることを忘れてはならない」と私たちは各所で餞けされました、さうです、私たちは新日本女性の代表であることも忘れま  
すまい

私たちがけふ日本を出発してしまひますと数少い六人の団体となつてしまひます、しかし私たちの背後から七千万の同胞が熱烈な応援をして下さることを思へば何物にもかへ得ぬ力が湧いて来ます [朝 7]

渡欧女子選手一行は、「小さな」少女たちの集団ではあったが、スポーツだけではなく「新時代の日本女性」の代表であった。「アトモスフィア」という英語が用いられていることも「新しさ」の表現である。同日の社説にも、女子選手の世界の舞台での活躍は、「もとより我女子運動界のために喜ぶべきことであるが、我婦人界の全体的向上のために、また国民意気の発揚のために、さらには国際親善のために大いに慶すべきことといはねばならぬ」[朝 2] とある。「選ばれたる」「勇ましき乙女達」は、「小さい幾多の乙女たち」に祝福されながら、「世界の覇を目指して」出発するのであった [7/26 夕 1]。選手たちは、日本という国家を背負った代表団として意味づけられている。彼女たちは、妻・母としての役割を全うしているわけではなかったが、独特の方法で国家や国際親善に貢献し、健やかで一生懸命で、礼儀正しいという点において理想的な女性像となっていた。

出発後は、前回大会同様、選手たちが、下関、京城、奉天、ハルビン、満洲里などを通過していくことが報じられる。そしてプラハに「はちきれるような元気で」到着、チェコの首相夫人や大会委員らに出迎えられ、午後五時から練習を行ったという [8/13 夕 2]。真っ先に乗り込んだ選手一行は、「毎日規則的猛練習をつゞけ」て、人見は槍投で世界記録を破る記録を出した [8/29 朝 7]。そして9月3日には、選手一行が紙面を通じて読者に次のように挨拶をしている。

故国を離れた時は未曾有の御後援を受けましたゞこれに酬いるところあらんと期するばかりでありましたがこの遠い外国に来て追々と大会は近づくと共に自分の本当の力を知るやうになりまして今日ではやゝ安心して全力を傾注し得る心地が致します、私共は勝敗は兵家の常なりとは申しません、たゞ私達の全力を尽して遥かに故国の同胞諸兄姉の御後援の加護によつてスポーツウーマンとして恥しくないやうな奮闘をしたいと念じてゐます、後一週間です、一同は極めて健康で食欲も旺盛で夜は夢も見ません、何とぞわれわれに有終の美を濟さしめんために皆様の御同情と御後援をお願い致します [朝 7]



9月7日にも人見からの電報が掲載され〔夕2〕、紙面を通して故国の人への丁寧な呼びかけが繰り返されているが、それも、今回の選手派遣では、全国の女学校八百校に寄付を募るなど、多くの支援を受けていたからであろう<sup>22</sup>。

競技会の模様は「わが選手活躍す 威力を示した人見嬢 中西、渡邊両嬢も予選通過」〔9/8朝7〕、「四百米継走に悠々一着で入選 六十米で人見嬢最初の得点 中西嬢は障害決勝へ」〔9/9夕2〕、「走幅跳決勝に人見嬢再び優勝 三種百米も第一着」〔9/9朝7〕、「世界女子オリンピック大会終る 十三点を得て日本は第四位 人見嬢の孤軍奮闘 ドイツ断然優勝す」〔9/10夕2〕と、日本選手中心に報道されていった。中でも人見は、他のどの選手よりも目立っている。人見は「あまりに多数の種目に出たのですべてに最善の結果は得られなかったが、個々の技量、実力をくらべればやはり人見嬢が殆どすべてにおいて一番だと各国間にもいはれてゐる」〔9/10夕2〕とされた。人見は、「老巧、堅実、智謀」を働かせることのできる「巨人」として描き出され、人見以外の五人の女学生の選手とは区別された〔9/7夕2〕。

大会終了後も、一行の動静は伝えられている。帰国前、選手たちは、ワルシャワ、ベルリン、ベルギー、パリなどを転戦した。新聞は、選手たちが、各地の競技会で真剣勝負の表情をみせる一方で、無邪気に買物をしていることも伝える。ロンドンでは、「デパートメント・ストアやウルウオース十銭均一店を廻り手みやげを集めるに余念なく、折角の訪英にも、見物よりもまづ買物をと女らしいところを見せた」とあり、上海でも、「残ったお小遣ひは皆こゝで使つてしまひませう」と日本より一歩手前だといふ一安心からすつかり打とけ大喜びで「買物をしているという」〔9/27朝7, 11/4朝7〕。前回大会の人見の単独遠征の報道にはなかった、「消費」と女との結びつきが、ここで姿を現している。

帰国時には、女子選手たちの肩をくんだ写真が掲載された。選手を代表して人見絹枝が、次のように述べる。

前回の大会にくらべ各国の出場選手の進歩には実に驚嘆しました、しかしわが選手があの大舞台での活躍ぶりはほとんど男子選手にも劣りはしない、女子として出来るだけの力が出たと思ひます、もちろんこれは外国選手にもあてはまることで四年前の大会にくらべると参加選手も倍加し、いづれも完成期に近いといつてよいほどの力量を示してゐました〔11/7朝2〕

日本女性というよりも、女性全体の団結と力強さを強調しているといえる。2年前のアムステルダム・オリンピックの際には、女子800メートルでゴールした選手たちが倒れたことから、女子に中距離は過酷すぎるといった報道がされた<sup>23</sup>。国内外に広まっていた女性の種目を問わないスポーツへの参入を危険視する言説を打ち消すような発言が、人見からなされたのである。

世界女子オリンピックに出場した選手たちに無数の少女たちが続くべきであるとする言説は、大会終了後により大きくなる。9月27日には世界女子オリンピックの写真(入場行進の写真、60メートル準決勝のゴールの写真)が掲載されたが[朝7]、その後も、跳んだり駆けたりする女子選手の視覚的表現は、非常によく登場していた。例えば10月12日には、女学生たちが陸上競技の大会でリレーのバトンパスをする場面の写真が掲載され、その記事には、「月を見て悲しむだけが女性の嗜みではない、現代女性は健康な身体と朗らかな性格を誇りとする」[朝9]とある。人見だけではなくプラハに遠征した女子選手だけではなく、その後に続くスポーツ少女たちが、肯定的に紙面の中に次々登場してくるのである。

大会の前後は、日本での女性の政治的位置が変化する兆しもあった。世界女子オリンピックの開幕を伝える記事が掲載された9月8日の朝刊1面には、内務省が婦人公民権案の議会提出を決定したという記事が大きくある。記事の最後には「欧米各国を見るに婦人参政権を認めてゐるのは英、米、独、澳、波、和、スエーデン、ノルウエー、カナダ、豪州連邦、アイルランド、ラトヴィア、リスアニア、ニュージーランド、ロシアなどでこれを認めないのが仏、白、西、スイスの諸国である、しかし婦人参政権を認めない白、西両国でさへも婦人公民権は認めてゐるのである」とあり、『大阪毎日』は婦人参政権を認めるべきとの立場である<sup>24</sup>。この記事には、保守的な貴族院では「わが国婦人の政治知識の貧弱さ」を挙げて反対の声が強いとあるが、世界女子オリンピックの報道では、欧米婦人たちと対等に競い合う日本女性の姿が繰り返し、伝えられた。「スポーツ」と「政治」は、全く違うようであり、ともに男性の領域とされてきたものである。世界のスポーツの舞台に堂々と出ていく女性たちは、日本女性が欧米の先進国の女性たちに追いついていること、あるいは追いつきつつあることを示すものであり、それは日本が欧米に追いつくという物語であると同時に、女性が男性の領域に進出していく物語であったといえる。

## 5. 結論

本稿では、ここまで『大阪毎日』の世界女子オリンピック報道を手がかりに、新聞での女性のスポーツの語られ方を考察してきた<sup>25</sup>。

1926年と1930年の報道をみたときに浮かび上がるのは、人見をはじめとする女性のスポーツ選手が、「新時代の女性」の理想として肯定的に紙面に描き出されていたという点である。彼女たちは、外見は、運動着や洋装（人見はこれに加えて断髪）で登場していたが、行動や発言は、真剣かつ勤勉で礼儀正しく、享乐的な「モダン・ガール」のイメージからはかけ離れていた。結婚や出産を否定することもなければ、男性を脅かすような素振りもみせなかった。政治的に覚醒しているわけでもなく恋愛に耽るわけでもなく、興味関心といえ、スポーツに関することと、わずかなショッピングに向けられていた。出身階層と受けた教育からみても、まさに将来は、家庭を守る「良妻賢母」となることが期待された存在であったが、そのことは直接には新聞紙面では語られていない。

近年の女子スポーツ選手の報道に関しては、競技者としての側面が矮小化され、家庭内での役割（「父に従順な娘」「主婦」「(将来の)母」）が強調されると指摘されてきた。また男性化（女らしさからの逸脱）が強調されることもあるという<sup>26</sup>。だが、本稿で分析した世界女子オリンピックの報道には、そうした良妻賢母の枠組みに選手たちをあてはめようとする言説や女らしさからの逸脱を非難・中傷する言説はほとんどない。小石原の研究によれば、1930年代半ばの少女雑誌には和装で家事に勤しむ女子選手が登場し、その優しさや大人しさが強調されていたようであるが、1926年と1930年の新聞には、そのような表象もない<sup>27</sup>。女子選手たちは、男性と同じような態度でスポーツに取り組み、奮闘していた。だからといって、その身体や性格が問題視されたり「男のような」「女らしくない」といった言葉で語られたりすることは、第2回大会でわずかにみられたほかは、なかった。彼女たちは、面白おかしく描き出される「異質な他者」などではなかったのである。こうした報道のあり方には、女性の読者を取り込もうとする大阪毎日新聞社の姿勢が反映されていたともいえる。従来の研究では、第一次世界大戦後、女性の活動領域は拡大していったものの、良妻賢母を軸とした女性観は維持されてきたとされている<sup>28</sup>。しかし、妻・母の役割から切り離された女子選手たちが「新時代の日本女性」として描き出されていたことは、当時の女性観の複雑さを示しているといえるだろう。

ただ、本稿でみられた女子スポーツの物語は、人見の死をきっかけとして、変化していった可能性がある。人見は、第3回世界女子オリンピックに出場した約11ヵ月後の1931年8月、24才の若さで乾酪性肺炎のため死亡した。人見を、他の「未熟」な女子選手たちと区別し、特別扱いする傾向は、すでに第3回大会報道でみられた。しかも、これだけ健康そのものの姿を見せていた彼女が病死したとなると、彼女が自ら切り開いたスポーツする女性の物語は、内側から揺らいでいかざるをえなかったと考えられるからである。また同じ世界女子オリンピックに関する表象でも、新聞とそれ以外の媒体で、女子選手の描かれ方が異なっていた可能性もあるだろう。これらについては、今後の課題としたい。

- 
- <sup>1</sup> スポーツとジェンダーをめぐる諸問題を整理したものに、飯田貴子＝井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』（明石書店、2004年）、來田享子「指標あるいは境界としての性別」杉浦ミドリ他編『身体・性・生：個人の尊重とジェンダー』（尚学社、2012年）所収41-71頁、有馬明恵「メディアとスポーツ」国広陽子＝東京女子大学女性学研究所編『メディアとジェンダー』（勁草書房、2012年）所収109-143頁がある。
- <sup>2</sup> 中島海「婦人の体育」『体育と競技』2巻3号（1924年3月）、35、37頁
- <sup>3</sup> 日本スポーツとジェンダー学会編『データでみる スポーツとジェンダー』（八千代出版、2016年）、20頁
- <sup>4</sup> 來田享子「スポーツへの女性の参入」飯田＝井谷編前掲書所収42-50頁
- <sup>5</sup> 來田前掲論文「スポーツへの女性の参入」、高橋一郎「女性の身体イメージの近代化」高橋一郎他『ブルマーの社会史』（青弓社、2005年）所収93-139頁。第一次世界大戦が日本における良妻賢母思想の再編および女子教育の転換（本稿との関係でいうと女子への運動奨励の機運の高まり）をもたらしたことに關しては、小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991年）の3章と4章を参照。
- <sup>6</sup> 來田享子「日本女子スポーツ連盟による女性スポーツ促進運動に関する研究」（中京大学博士論文、2000年）の3章3節
- <sup>7</sup> 小石原美保「1920-30年代の少女向け雑誌における『スポーツ少女』の表象とジェンダー規範」『スポーツとジェンダー研究』12号（2014年3月）4-18頁。他にも、部分的に女性のスポーツのメディア表象を取り上げているものとして、今田絵里香『「少女」の社会史』（勁草書房、2007年）や土田陽子『公立高等女学校にみるジェンダー秩序と階層構造：学校・生徒・メディアのダイナミズム』（ミネルヴァ書房、2014年）がある。新聞の分析を通して和歌山の女学校イメージの変遷を探っている土田によると、大正期には女学生のスポーツに関する記事がかなり目立ち、健康的で活動的な女学生像が生まれたが、大正末期以降は野球は男子の種目になるなど競技種目のジェンダー化が定着した。

- <sup>8</sup> 大阪毎日新聞社編『大阪毎日新聞五十年』（大阪毎日新聞社、1932年）、393-418頁。海水浴場設置に関しては、綿貫慶徳「明治後期から大正期における大阪毎日新聞社の浜寺海水浴場経営に関する史的考察」『体育史研究』21号（2004年3月）、1-14頁を参照。
- <sup>9</sup> 1926年6月1日から10月15日、1930年7月1日から11月17日のすべての紙面について、国会図書館所蔵のマイクロフィルムで目を通し、世界女子オリンピックにかかわらず広く女性のスポーツに関する記事を抽出した。
- <sup>10</sup> 來田享子「アムステルダム大会への女子陸上競技採用決定直後のFSFIの主張：FSFIとIOCの往復書簡の検討から」『体育学研究』43巻2号（1998年7月）91-101頁
- <sup>11</sup> 内藤千珠子『帝国と暗殺：ジェンダーからみる近代日本のメディア編成』（新曜社、2005年）11頁
- <sup>12</sup> 小森陽一他「新聞のディスクリブル分析へ」石田英敬＝小森陽一編『社会の言語態』（東京大学出版会、2002年）11頁
- <sup>13</sup> 同前
- <sup>14</sup> 土屋礼子「大阪の新聞による女性読者の組織化」大阪市立大学文学研究科叢書編集委員会編『近代大阪と都市文化』（清文堂、2006年）所収259-274頁。女性記者は明治期から各社にいて、1915年には東京で婦人記者倶楽部が発足した。大正期から昭和初期には、地方紙にも婦人記者がみられるようになったという（春原昭彦「新聞と女性」春原昭彦他編著『女性記者：新聞に生きた女たち』（世界思想社、1994年）所収2-31頁。
- <sup>15</sup> 井上馨「大正期における婦人参政権運動について（その4）」『初中学園研究紀要』18号（1986年3月）25-36頁。
- <sup>16</sup> 婦人公民権案の審議の推移については、松山治郎「婦人公民権案の推移」『法学論集』7号（1970年12月）81-118頁、佐治恵美子「浜口内閣期の婦人公民権問題」『日本史研究』292号（1986年12月）1-25頁。婦人参政権についての研究は、組織的活動の分析に偏りがちであったが、文化的表象の問題に着目すべきであるとしているのが、グレゴリー・M・フルーグフェルダー（樹本健訳）『婦人参政権』再考』吉見俊哉他『拡大するモダニティ』（岩波書店、2002年）所収63-114頁、である。
- <sup>17</sup> 新聞記事の出典は〔発行月日、朝夕刊の別、掲載頁〕と略記する。〔8/1朝1〕とある場合は、（3章は1926年、4章は1930年の）8月1日朝刊1頁からの引用を意味する。また文中で発行月日に言及している場合は朝夕刊の別と掲載頁のみを挙げるなど、必要な出典情報のみを〔 〕に入れて記した。なお引用した史料には現在からみると不適切な表現もあるが、歴史の実相を示すために、そのまま使用していることを断っておく。
- <sup>18</sup> 健母会とは、女子スポーツの普及に努めた団体で、木下東作が中心にいたことから大阪毎日新聞社と関係が深かったといえる。ただ組織の全体像はわかっていない（來田前掲博士論文49-51頁）。
- <sup>19</sup> 7月6日にも、二階堂体操塾の在阪同窓生で送別会が開かれたという記事がある〔朝7〕。
- <sup>20</sup> 人見がこうした医療的言説に対しどのような見解を示していたかは、興味深い問題である。人見は、自著で、女子の種目に制限をかけることには反対し、結婚や出産後も活躍する欧米の女子陸上選手がいることを「現代の陸上競技が女子の体に悪いとかとりとめのない何の研究もしないで世間の人等に言ひ広める我国の医者や女学校の校長の鼻先に此のことを

た、きつけてやりたい」(人見絹枝『女子スポーツを語る』人文書房、1931年、17頁)としているが、月経は「病氣」であり月経時のスポーツ練習や競技会出場は中止すべきであると述べている(人見絹枝『戦ふまで』三省堂、1929年、56-66頁)。人見は、女子スポーツをめぐる医療的言説の大半に懐疑的であったが、月経の病理化言説は、高等女学校での教育を通じて内面化していたのであろう。月経の病理化・医療化については、田口亜紗『生理休暇の誕生』(青弓社、2003年)を参照。

- <sup>21</sup> 「モダンガール」の現象については、伊藤るり他編『モダンガールと植民地近代：東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』(岩波書店、2010年)、磯山久美子『断髪する女たち：1920年代のスペイン社会とモダンガール』(新宿書房、2010年)に詳しい。伊藤るり他編に収録された牟田論文では、日本での「モダンガール」「新しい女」「良妻賢母」の関係性が論じられている。
- <sup>22</sup> 人見絹枝『ゴールに入る』(一成社、1931年)45-76頁
- <sup>23</sup> 来田享子「レースは過酷だったのか」井上邦子他編著『スポーツ学の射程：「身体」のリアリティへ』(黎明書房、2015年)所収29-38頁
- <sup>24</sup> 社説「婦人公民権に就て」では、市町村公民権しか認めない今回の内務省提案に対して、少なくとも道府県までは拡大すべきではないかと主張している [9/9朝6]。
- <sup>25</sup> 『大阪毎日』が世界女子オリンピックを最も報道していたことは、ある意味当然であり、他紙とは温度差があった。筆者は『東京日日新聞』『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』にも目を通した。概略だけ記すと、第2回大会では『東京日日』は、『大阪毎日』のようではないにせよ、人見のヨーロッパ遠征を、それなりに力を入れて報じていた。一方、『東京朝日』ではかなり記事が少なく、『大阪朝日』も、大会についてはやや大きめの記事を載せているが、どちらかという让世界女子オリンピックからは距離を置いていた。第3回大会では、いずれの新聞も前回大会より報道に力を入れていて、特に『朝日』が報道を充実させていた。この背景の一つには、女子スポーツの普及、アムステルダム・オリンピック以降の日本の国際競技での活躍、人見の知名度の向上が挙げられるだろう。また、婦人公民権を認める気運が高まるなかで、女子選手たちは、新しい婦人の力を象徴するような存在となり、『大阪毎日』以外の新聞にとっても、その動向は無視できないものとなっていたといえる。
- <sup>26</sup> 飯田貴子「新聞報道における女性競技者のジェンダー化」『ジェンダーとスポーツ研究』1号(2003年3月)4-14頁、有馬前掲論文
- <sup>27</sup> 小石原前掲論文。ただ、人見の性格を「女らしく優しい」と同級生が話す記事はある [1926/8/31朝9]。
- <sup>28</sup> 小山前掲書

本研究はJSPS科研費・若手研究B(課題番号25870451)の助成を受けたものです